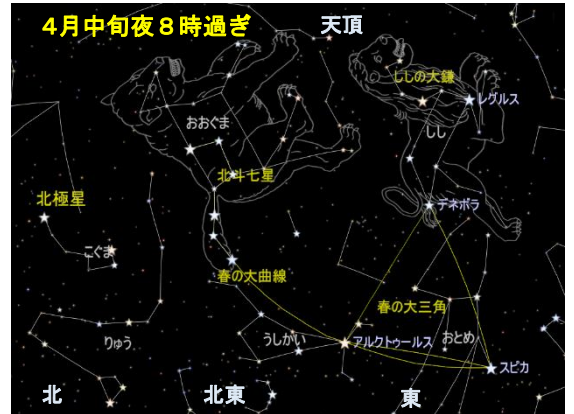


★令和6年4月から月1回発行になります★

★ 今月の星もよう ★

4月中旬夜8時頃、東の空にはすでに春の星座が広がっています。東から北東の高い空に並ぶのは大きな2頭の動物星座、「しし座」と「おおぐま座」です。南側の空に昇っている「しし座」は、春を代表する星座で、<ししの大鎌>と呼ばれるハテナマーク「？」を裏返した星の並びが、ししの頭から胸を表しています。ししの胸元で光っているのは1等星レグルス、さらに東側には尻尾にあたる2等星デネボラが輝いています。「しし座」の北側に並ぶ「おおぐま座」は、「北斗七星」と呼ばれるヒシャクの形をした明るい星々の並びがおおぐまの背中から長い尻尾にあたるため、とても見つけやすい星座です。「北斗七星」は春から夏にかけて北の高い空でよく自立ち、ヒシャクの口先にある2つの星の間隔を、口が開いている方向へ5倍に延ばすと北極星に辿り着くことから、北極星を探す目印として世界中で親しまれています。また、ヒシャクの取っ手の先から、「うしかい座」の1等星アルクトゥールスを通り、「おとめ座」の1等星スピカまで伸ばしたカーブを《春の大曲線》、アルクトゥールス・スピカ・デネボラを結んだ三角形を《春の大三角》と呼び、どちらも春の星座を探す目印ですので、ぜひ探してみてください。



※星図はステラナビゲーター11を用いて作成

★ 88星座のお話

全天には88の星座が描かれますが、これらの星座たちはいつ、どのようにして作られたのでしょうか。星座の始まりはとても古く、今から約5,000年前のメソポタミア地方の人々が、農作物を育てるために、星々を線で結んで畑や農具などの形に見立て、季節を知る目安にしたのが、星座の始まりだといわれています。それが古代ギリシャに伝わり、2世紀頃、ギリシャの天文学者プトレマイオス（トレミー）がそれまで伝わっていた星座を48個にまとめました。これが、現在も使われている「プトレマイオス（トレミー）の48星座」です。15世紀になると、ヨーロッパでは大航海時代が始まり、探検家たちによって北半球からは見えない南天の星々が記録され、さらに17世紀には、望遠鏡が発明されることでより多くの星が見えるようになったため、天文学者たちによって続々と新しい星座が作られました。1922年には、国際天文学連合が全天の星座を「88星座」と定め、1928年に星座の境界線が決められました。それまでの星座は星座絵の姿でしたが、この時に星座は境界線で区切られた空の区画になり、全ての星は必ずどれかの星座に所属するようになりました。星座が公式に全天88個と決められたのは、ほんの100年ほど前のことなのです。



★ 夕空で月が木星とすばるに接近！

4月上旬、日の入り後の西の低い空で、一番明るく輝いているのは木星（-2等）です。4月10日には明るい木星を目印に、非常に細いため普段は観察しづらい新月の翌日の月（月齢2弱）を探することができます。また、翌日11日には三日月がすばる（プレアデス星団）に近づきます。三日月はそれほど眩しくないため、すばるが隠れることなく両方を観察することができるでしょう。少し暖かくなったこの季節、外出して観察してみてください。話題の彗星もこの近くにいます（裏面参照）。

月は大きさを強調して描いています

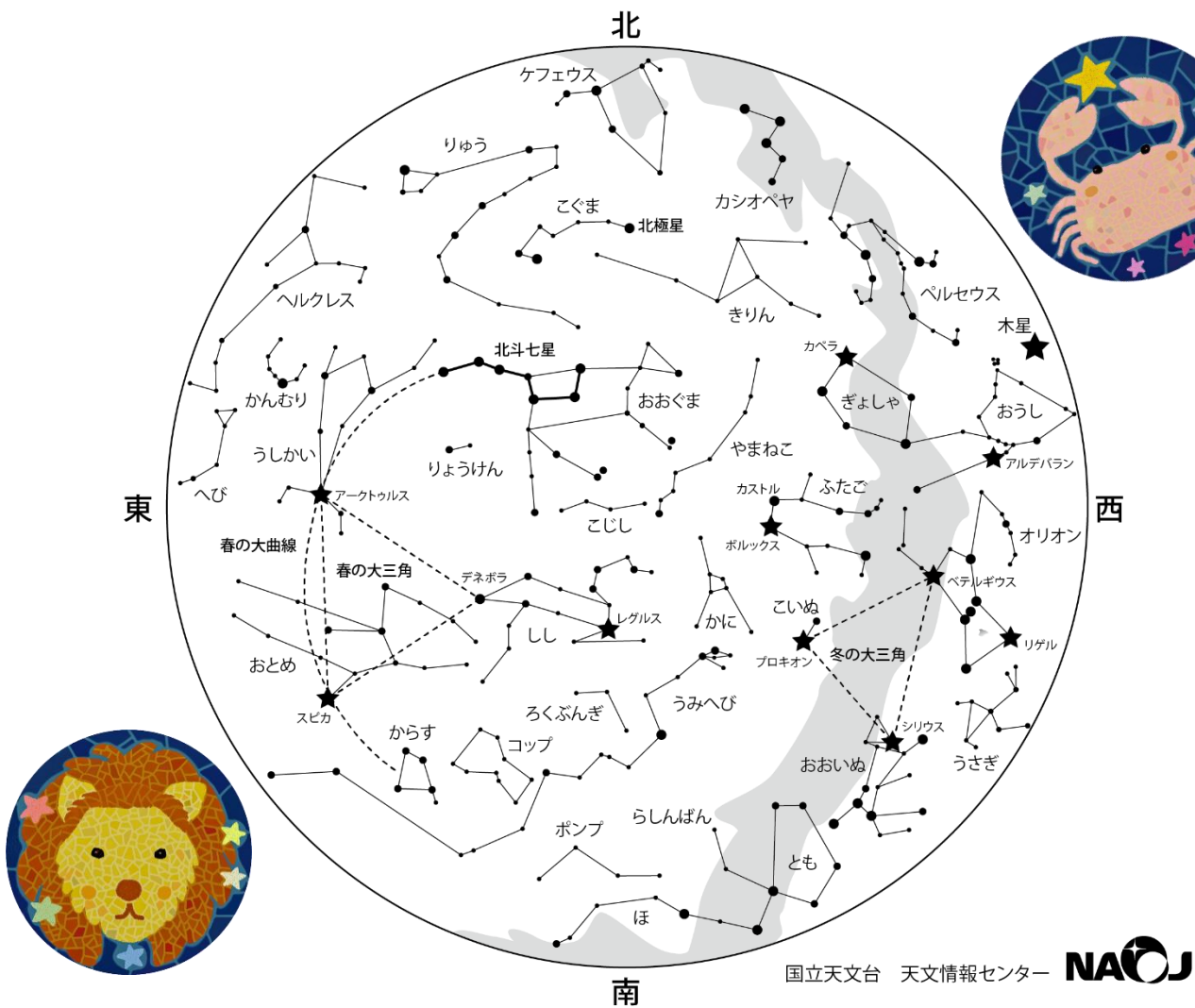


★ 4月のプラネタリウムの内容については、別刷りの「投影案内」をご覧ください ★★

★ プラネタリウムのお休み

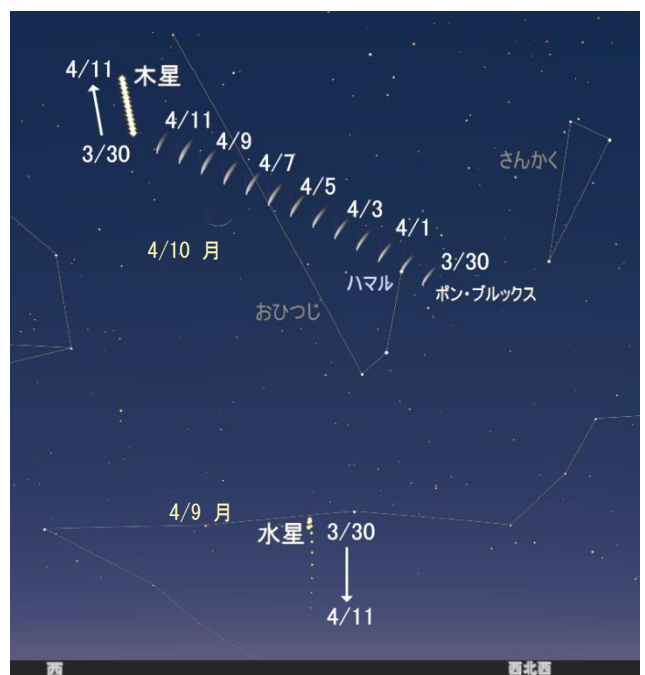
4/1(月)、8(月)、15(月)、17(水)、22(月)、30(火)

4月中旬午後8時頃の星空



★ 4月の主な天文現象

- 1日(月) ポン・ブルックス彗星すいせいがおひつじ座アルファせい α 星ハマルと並ぶ
- 2日(火) ① 下弦かげん
- 6日(土) 明け方細い月かせいと火星が並ぶ
- 9日(火) ② 新月しんげつ (米国などで皆既日食かいきにっしょく)
- 10日(水) 細い月と木星、ポン・ブルックス彗星せつきんが接近
- 11日(木) 明け方火星と土星が大接近、三日月とプレアデス星団が接近
- 16日(火) ③ 上弦じょうげん
- 21日(日) ポン・ブルックス彗星が近日点きんじつてんを通過つうか
- 24日(水) ④ 満月まんげつ



夕方西の空のポン・ブルックス彗星と木星水星の動き星座の位置を固定して1日刻みで描いています